

令和六年一月十日発行  
皇學館論叢第五十六卷第四号 抜刷

延喜式祝詞に現れたる対句的表現についての覚書

足  
立  
涼

## 延喜式祝詞に現れたる対句的表現についての覚書

足立 涼

### □ 要 旨

上代における「対句」については、記紀万葉に見られる上代歌謡のそれについて論ぜられてきてある。しかし、延喜式祝詞における対句については、それらの研究の中で触れられることはあるものの、中心に論ぜられたものは見当たらない。そこで本稿では、延喜式祝詞に現れたる対句的表現について論ずる。

先行の論を整理すると、対句はその機能によって①大事な部分の強調、②全体の表現、③心情の昂揚の形式、④儀礼行動の強調、⑤対偶・対比を利用した表現の美といふ五つに分類できる。

祝詞を確認するに、祝詞においてもこの五つに分類できることが確認できた。

またなかで、順序が前後してゐる例があることに注目し、意味の上において順序が入れ替はっても問題なければ入れ替はることもあるし、固定されるべき順序であれば必ず固定されるといふこと、これは延喜式祝詞に現れたる対句的表現の特色のひとつと云つてよいのではないかといふことを考察した。

祝詞は、韻文的散文であり、口誦文芸的記載文芸である。ゆゑに原初的対句も、漢詩的対句も見られる。この性質は、対句論を考へていくなかで重要な材料であるのではないか。

### □ キーワード

延喜式祝詞 対句 上代歌謡 韻文的散文 口誦文芸的記載文芸

※本稿において、延喜式祝詞の引用は基本的に青木紀元編『祝詞』<sup>(1)</sup>に依ったが、字体は通用字体に改めた。『古事記』における歌謡の引用は日本古典文学大系『古代歌謡集』<sup>(2)</sup>に、『万葉集』の歌謡の引用は新潮日本古典集成成本に依り、<sup>(3)</sup>歌謡番号はこれらに従った。引用文における傍線は筆者が附した。中略など、筆者が引用文を改編した場合、二重山括弧《》内にその旨を記した。山括弧〈〉は言語や文の意味を記述する場合に使用した。筆者の文章は新字体・歴史的仮名遣で記し、拗音・促音は小字で表記した。

## 一、問題の所在

『延喜式』巻八「祝詞」に所載の祝詞群、いはゆる「延喜式祝詞」には、「対句的表現」が複数例見て取れる。筆者が検出したところ、百二種類・二百八十八例存した。それらを本稿末尾に表として示したので適宜参照されたい。<sup>(4)</sup>本稿は、かかる延喜式祝詞に現れたる対句的表現について考察を試みるものである。

いま「対句的」と云ったのは、本稿で扱ふ「対句的表現」の対象は、一般に云ふ「対句表現」と比べてかなり広い範囲を扱ふからである。狭義・本義としての「対句」、すなはち漢詩におけるそれは、対応する句どし、それぞれの語が同一の品詞であり、文法構造が同一であり、意味・音韻が対応してゐなければならない。一方我が国の上代歌謡においては、たとへば、

賢し女を 有りと聞かして／麗し女を 有りと聞こして（『古事記』上巻・大國主神段 歌謡二）  
といったやうな、表現を繰り返しうち一部を変へたものや

つばらにも 見つつ行かむを／しばしばも 見放けむ山を（『万葉集』巻一・一七）

といったやうに、それぞれの品詞や文法構造が異なる箇所があるものであっても、広義の「対句」として扱はれることが多い。夙に橘守部は前者のやうな例を「疊句」と称し、「対句」と峻別したが、この後取り上げる諸論考に代表されるやうに、近年ではかういった例も含めて我が国の「対句」だとする見方が主流である。

また言語学上における「句」とは、「語」より上、「節」より下の文法単位であり、たとへば、

8 甘菜／辛菜（行頭の算用数字は本稿末尾掲載の表における通し番号を示す。以下同。）

は、「甘」と「辛」との部分を対比した表現であるが、それぞれ単一の名詞であり、これらを「対句」とは一般には称さないであらう。しかし近年は、統語論などの分野において周知のやうに、単一の語であってもそれ自体が「句」を構成してゐるといふ見方がなされるやうになってをり、本稿でもその立場をとる。よつて本稿が扱ふ対句的表現とは、対応するひとつ以上の語から成る句どうしにおいて、それぞれの品詞がおほむね同一であり、文法構造がおほむね同一であり、意味において同義・類義・対義といった対応が見られるものを一括して指すことにする。この定義は漢詩における「対句」よりはもちろん、我が国における一般的に「対句」よりもかなり広い範囲を含むので、「対句的表現」と称するのである。これに該当するものが、表に挙げた例といふことである。

なほ現代祝詞作文における修辭法の分類では、稲村眞里氏によると、「甘菜／辛菜」のやうに対偶語を用いた表現は「対語法」と称され、「5 千類／八百類」のやうに同一の種類の語を重ねる表現は「重語法」と、「35 安幣帛の／足帛帛」とのやうに同一の意味の語を重ねる表現は「疊語法」と称され、「2 手肱に水沫画き垂れ／向股に泥画き寄せて」のやうないはゆる「対句」が「対句法」と称されるが、本稿ではそれらをまとめて「対句的表現」として取り扱ふことになる。

さて我が上代における「対句」については、次に確認するやうに、『古事記』『日本書紀』『万葉集』における歌謡

に現れたるそれについて論ぜられてきてをり、多数の論考がある。しかし、延喜式祝詞における対句については、諸論考のなかで少しく触れられることはあるものの、中心に論じたものは管見では見当たらない。そこで本稿では、先学の知見を活用しつつ、延喜式祝詞における対句的表現について、論じていきたいと思ふ。

## 二、先行の対句論

上代歌謡における対句についての研究は、主として次のものがある。年代順に示す。

○大畑（神野志）幸恵氏「〈対句〉論序説——記紀歌謡及び初期万葉長歌の〈対句〉——」<sup>(7)</sup>（以下「神野志①論文」と称す）

○稲岡耕二氏「万葉集の方法——対句の本質——」<sup>(8)</sup>（以下「稲岡論文」と称す）

○神野富一氏「古代歌謡の対句——〈繰返し〉を超えて——」<sup>(9)</sup>（以下「神野①論文」と称す）

○神野富一氏「古代歌謡の対句——その本質——」<sup>(10)</sup>（以下「神野②論文」と称す）

○神野志幸恵氏「〈対句〉の方法・覚書」<sup>(11)</sup>（以下「神野志②論文」と称す）

○山本直子氏「古代歌謡の対句と祭式儀礼」<sup>(12)</sup>（以下「山本論文」と称す）

これらの先行論は、対句の通時的な流れを、その起源は言霊の力を期待した呪詞的表現によって発生したものであり、同一句の繰り返しがまづあって、記紀歌謡や初期万葉歌に見られるやうな一部を言ひ替へた「原初的対句」が生まれ、その後漢詩の影響を受けて後期万葉歌に見られるやうな修辭を凝らした「漢詩的対句」へと変はっていった、といふやうに捉へる点で、おほむね一致する。

なかで、対句論の先駆けとなる神野志幸恵氏は、言いかへや繰り返しの対句が、全部もしくは後句だけ省略されてゐたり、前・後句が入れ替はつてゐたりするものがあることに注目し、「順序はさておき各々の句をうたうところこそが肝心であることを物語る」と指摘する。また国見の歌謡における国讀めの部分にの対句が多くみられることから、「国見うたにおいて、最も大事な部分は予祝の性格をもつ讚め詞の部分であつて、いくら強調しても強調しすぎることではない」と述べ、

記紀歌謡・初期万葉長歌の繰り返し、言いかえをその特徴とする（対句）は、漢詩文の影響後の整齊の美を生命とする様な（対句）とは本質的に異なるものであり、非日常言語の表現の基本形式の一つとして捉えるべきで、その本来的機能は、うたわれる即ち口誦のレベルで、大事な部分を強調する点あるいは全体を表現する点にある。と、原初的対句の「大事な部分の強調」といふ機能に注目してゐる。（神野志①論文）

またさらに、二句を一単位としそれを連結して構成される長歌は、二部的対立構造の短歌とは構造が異なり、長歌の構造はむしろ、祝詞のやうに韻律をもつてことばを連ねていくものと親近性があつて、古代長歌は儀礼的な場にはつて現れることが多く、予祝を担ふ祝詞としての性格をもつことから、「祝詞」から「祝詞」と「長歌」とへそれぞれ派生したことを考察してゐる。そしてその本質として、「そうした句の並び——羅列・列挙・繰り返しのようなものから、言い換えといえるものまで含めて——の役割は何かといえは、大事なものの強調ということにほかならない」と、「大事な部分の強調」といふ機能をあらためて論じてゐる。（神野志②論文）

稲岡耕二氏は、原初的対句のなかでも「朝／夕」といふ対偶表現に注目し、原初的対句に見られる「朝／夕」は、それに附随する句の順序を入れ替へても意味の上でほとんど差がないことから、「繰り返しに近い言い換え」であり、「それによつて一日の全体を暗示するもので、時間表現の古代的様式」であるとす。一方漢詩の影響後は、「対句も

言靈的な強調を主とする始原的な性格ではなく、情景描写や精細な叙事をになう中国詩の対句的なものへと変つていった」のであり、人麻呂歌に嚆矢が見られるやうに、「対偶によつて一日全体をあらわすのではなく、〈朝〉〈夕〉のおおのの時を明確に限りつつ、流れてかえらぬ時間を印象するもの」へと変化していくことを指摘する。すなはち、記紀歌謡や初期万葉歌に見られる対句は、大部分が繰り返しや言い換えに近いものであり、まれに〈朝〉〈夕〉のような対偶語を含む例があつても、それは〈朝〉や〈夕〉に特定される情景や行爲を歌っているわけではなく、一日全体を把握し表現する範疇的な意味を持つと解される。《中略》

そうした繰返しの対句から、対偶性を強めた漢詩的な対句への変化を必然的なものとした契機は、口誦のうたから記載の歌へ、つまりうたわれるうたから文字を介して作られる歌への変化や、それにもなう歌の内容と作者の意識の変化に求められよう。

と、原初的対句の対偶語における全体の表象から漢詩的対句の対偶表現におけるそれぞれの対比、口誦文芸から記載文芸への変化を論じてゐる。(稲岡論文)

神野富一氏は、原初的対句から漢詩的対句への流れは肯定するも、同一句の繰り返しから原初的対句へといふ言説については疑義を呈してゐる。原初的対句は慥かに対象を繰返し表現するといふ点に特色を持つが、

ある対象について繰返し述べるといふことと、その表現が繰り返しとなつてゐるといふことは別であり、むしろある対象について繰返し述べながら少しでも異なる語句で表現しようとする点に、古代歌謡の対句の表現上の特色を認めるべき

であり、類義語を用ゐたり、僅かに接頭語を増減することによつて、繰返しを回避し、ことさらに対句の体を保たうとしてゐるかに見え「少くとも対句と繰返しとの連続性を現存資料から実証する道は、ほぼとゞざされている」と指摘

してゐる。すなはち原初的対句については、

古代歌謡の一表現技法としての対句は決して全くの繰返しと連続的ではなく、あくまで対句の形式として独自に現前しているということ、だから対句の本質も安易に繰返しのそれへと解消すべきではなく、対句自体のそれとして把握すべきだということ

が重要であると論ずる。(神野①論文)

また、神野志①論文や稲岡論文が云ふ、原初的対句が漢詩的対句と本質的に異なるといふ点には同意するが、両氏が最終的に「重要な部分の強調」「全体の表現」のみに留まつてゐる点には「不満」とし、繰返しに近い原初的対句でも、少しでも語句を変へてその形式上の対称性を保持してゐるのであり、さらに対句が、文脈的に最も重要な意味の箇所ではなく、感情の強調的に表れてゐる例もことから、「古代歌謡における対句は、歌い手の心情が昂揚した時に現れる形式」とする。「讚歌系統の歌謡に対句が現れやすいのも、その讚嘆の心情が対句形式によつてになわれうるから」だといふ。(神野②論文)

山本直子氏は、神野志①論文が述べた「大事な部分の強調」といふ対句の機能を認めたくへで、人物の動作や行動を叙述した対句に注目し、「行動を語ることによつて、結果的に歌謡の主題を賛美する方向へ向かうものもあるが、多くは「行動を語ること」そのものを目的としている」といふ対句の存在を指摘する。歌謡のなかには、単に詠唱されたのではなく、専門的な歌ひ手によつて身振りや所作を伴つて歌はれたであらうものもあり、それは儀礼の場に附属する宴席だと考へられ、その中での対句は、主体の行動を具体的に叙述する手段として用ゐられてゐることから、かかる対句は、儀礼に伴ふ行動を具体的に語るといふ意識を背景に持つ表現であると論じ、「行動の強調」といふ対句の機能の新たな側面を主張した。(山本論文)

延喜式祝詞に現れたる対句的表現についての覚書(足立)



以上、先学の論じたところを概観してきた。諸氏によれば、上代歌謡の対句（特に原初的対句）は、その機能からおほよそ次の四つに分類されよう。あらためて具体例をあげつつまとめる。

① 大事な部分の強調（神野志①論文）

纏向の 日代の宮は 朝日の 日照る宮／夕日の 日影る宮 竹の根の 根足る宮／木の根の 根蔓ふ宮（『古事記』下巻・雄略天皇段 歌謡一〇〇）

ここにおける傍線部はすべて「宮」を讃めることに費やされたものである。ただ叙述するだけであればこのやうな対句は必要ないが、対句を以って繰り返し表現することによって、宮の素晴らしさを強調してゐるのである。

② 全体の表現（稲岡論文）

纏向の 日代の宮は 朝日の 日照る宮／夕日の 日影る宮（再掲）

ここにおける「朝」「夕」の対偶は、特定の時点を云ふのではなく、一日中日の照ることを表はす表現であり、「朝」「夕」と云ふことよつて「一日中」といふ全体を表現してゐるのである。

③ 心情の昂揚の形式（神野②論文）

御眞木入日子はや 御眞木入日子はや 己が命を 盗み死せむと 後つ門よ 行き違ひ／前つ門よ 行き違ひ 窺はく 知らにと 御眞木入日子はや（『古事記』中巻・崇神天皇段 歌謡二二）

これは神の使ひの少女が天皇の命を狙ふ者がゐることを知らせる歌であるが、文脈としては天皇の危機を伝える「己が命を 盗み死せむと」の部分が重要と思はれる。にも関はずその次の叛逆者の動作を語る部分が対句になっているのは、「殺し屋の動作を逼真的に描くことよつて歓喜される危機の感情、まさに今天皇の身に危機が迫っている」という場面にもよおす、人間的な心情の表現」だからである。

④儀礼行動の強調（山本論文）

奥山の 賢木の枝に しらか付け 木綿取り付けて 齋瓮を 齋ひ掘り据ゑ／竹玉を 繁に貫き垂れ（『万葉集』  
卷三・三七九 坂上郎女）

これは祭祀行為の具体的表現である。このやうに、行動を叙述する対句が、行動そのものを具体的に語ることを目的として用ゐられてゐるのである。

これらはそれぞれ異なる主張であるが、矛盾することではない。つまり、上代歌謡における対句には、かかる特徴がそれぞれ見られるといふことである。

また原初的対句にはほとんど見られないが、漢詩的対句におけるものとして、次の分類も当然想定されるだらう。

⑤対偶・対比を利用した表現の美——いはゆる漢詩的対句——

渡る日の 陰も隠らひ／照る月の 光も見えず（『万葉集』卷三・三三四 山部赤人）

これは句どうしでそれぞれの品詞や文法構造が同一であり、意味の上で対偶になつてゐるといふ、漢詩における対句の特色が盛り込まれてゐるものである。

それでは、延喜式祝詞に現れたる対句的表現はどうであらうか。

三、延喜式祝詞に現れたる対句的表現の分類

先に挙げた五つの分類に従つて、延喜式祝詞に現れたる対句的表現の分類を試みる。

② 全体の表現

論の運びの都合上、順番が前後するが、「全体の表現」から考察をはじめたい。  
当該表現が最も多く用いられるのは神への献上物についてである。たとへば、

8 甘菜／辛菜

は、「甘・辛で味を二分し、野菜を総称する祝詞独特の巧みな表現」で、

9 鰭の広物／鰭の狭物

は、「ひれの広い大きな魚・ひれの狭い小さな魚と述べて、大小すべての魚を総称している」のであり、

10 奥つ藻葉／辺つ藻葉

は、「海の沖の方に生える海藻・辺（海辺）に生える海藻と表現して、すべての海藻を総称している」<sup>(13)</sup>。

39 毛の和き物／毛の荒き物

は、「毛のやわらかな毛物（獣）と毛のかたい毛物の意で、獣を総称する祝詞の語法である」<sup>(14)</sup>。

これらは神への献上物としての山の幸、海の幸を表現するにあたり、それぞれの味であったり、体躯の特徴であったり、生育地であったりとの対偶語を用いることにより、〈あらゆる野菜〉〈あらゆる魚〉〈あらゆる海藻〉〈あらゆる獣〉を表現してゐるのである。

23 夜の守り／日の守り

34 朝御饌／夕御饌

44 朝日の日向かふ処／夕日の日隠る処

75 朝の御霧／夕の御霧

76 朝風／夕風

80 夜七日／昼七日

などの例は、稲岡論文がまさに述べたやうに、「朝／夕」「夜／昼（日）」の対偶を用ゐることによって結果として（一日中）を表はしたものである。<sup>(15)</sup>

このほかにも、

1 天つ社／国つ社（あらゆる神社）の意

73 高山の末／短山の末（あらゆる山の頂）の意

などがあるが、全体を表現した対句的表現は、神への献上物の表現と一日中の表現とがほとんどである。

一日中の表現は、稲岡氏が特に注目してゐるやうに、対偶語を用ゐた対句的表現のなかで最も一般的で基本的であったと考へられる。それゆゑ用例数が多いのであらう。また神への献上物の表現は、祝詞といふ性質上その描写が多くなるのは当然である。それゆゑ用例数が多いのであらう。だがそれを差し引いて考へると、祝詞における対句的表現では、「全体の表現」といふ用法はあまり多いとは云へない。

① 大事な部分の強調

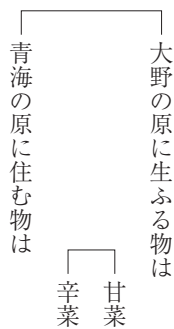
②と順番を前後させたのは、②「全体の表現」が結果として「大事な部分の強調」になつてゐる場合もあるからである。たとへば前掲した神への献上物の表現について、

大野の原に生ふる物は甘菜・辛菜、青海の原に住む物は鱈の広物・鱈の狭物、奥つ藻葉・辺つ藻葉に至る迄に（祈

年祭）

延喜式祝詞に現れたる対句的表現についての覚書（足立）

を例に文全体で捉へると、ここにおける対句の対応関係は、



鱈の狭物

奥つ藻葉  
辺つ藻葉

に至る迄に

となる。このやうに入れ子構造になった対句的表現は多い。かうして修辭に技巧を凝らして表現するのは、それが大事なことであるからにはかならない。繰り返すが、「祝詞」といふ文において、神への献上物についてが重要事項であることは自明である。

また、全体の表現でもあった、

44 朝日の日向かふ処／夕日の日隠る処

は、対偶部分を見れば「朝夕」を以って（一日中）を表現したものであるが、句全体で見れば、前掲の『古事記』歌謡一〇〇のやうに、「朝日が輝かしく直射す地であり、夕日が隠れるまで照り続ける良き地の意」<sup>16</sup>であり、宮殿を讚美した表現である。

17 下つ磐根に宮柱太知り立て／高天原に千木高知りて

は、

「下つ磐根に」宮柱  
「高天原に」千木  
「太知り立て」高知りて

といふ構造であるが、これは社殿の建造をそれぞれ対にして云ふといふ技巧が凝らされてゐる。「要するに此の二句一聯は、上古の宮殿建築に於て最も重要視された、柱と千木とを取つて、宏大で堅固なる宮を壽ぐ詞である」といふことである。かかる例はこのあと見る⑤「対偶・対比を利用した表現の美」にも通ずるものがあらう。

このほかにも、

4 八束穂の／いかし穂に

14 堅磐に／常磐に

35 安幣帛の／足幣帛と

71 天つ祝詞の／太祝詞事

92 生日の／足日に

といったやうな、類義語を重ねたいはゆる「重語法」によつて表現される例も、単に言及するのであれば単体で云へばいいところを、わざわざ表現を替へて繰り返すのは、それが重要なことであるからである。

かういった重要な部分の強調は、神への献上物関係、宮殿・社殿関係、天皇関係、祭祀用語関係などに頻出し、多く見られる用法である。

### ③ 心情の昂揚の形式

現代人の感覚からして、上代人がなにもに心情を昂揚させたのか、推し量るのは簡単ではない。神野氏が述べたやうな、「その文脈上特に重要な部分ではない箇所が対句になってゐるもの」といふ定義で抽出してみれば、たとへば前掲『古事記』歌謡二二に類似するやうな、

20 下より往かば下を守り／上より往かば上を守り

が挙げられよう。これは悪神が扉の上下から侵入した際の守護を希求する章句であるが、その侵入経路を具体的に描写することで、悪神が迫ってくる様子が生々しく感ぜられ緊張感を覚えさせ、神がそれを守護するといふことを強調することに繋がる。

62 宮進めに進め／宮勤めに勤めしめ

は、「宮廷の仕事にいやが上にも進ませ、勤めさせる意」<sup>(18)</sup>で、宮廷人がそのやうに勤務にいそしむことを祈願する章句である。職員がしっかり勤務に励むことを祈るのは、現代人の我々にもよく解る感情ではなからうか。

このやうに、心情の昂揚によって対句が用ゐられたと思はれる例はいくつか見いだすことができる。

### ④ 儀礼行動の強調

祝詞は祭祀の場で詠まれるものであるからして当然であるが、儀礼行動を表現した対句は少なくない。たとへば2  
く7を含む、

皇神等の依さし奉らむ奥つ御年を、手肱に水沫画き垂れ、向股に泥画き寄せて取り作らむ奥つ御年を、八束穂の  
いかし穂に皇神等の依さし奉らば、初穂をば千穎八百穎に奉り置きて、甌のへ高知り、甌の腹満て双べて、汁に

も穎にも称へ辞竟へ奉らむ（祈年祭）

といふ一節は、

皇神等の依さし奉らむ奥つ御年を

手脛に水沫画き垂り  
向股に泥画き寄せて

取り作らむ奥つ御年を

八束穂の  
いかし穂に

皇神等の依さし奉らば

初穂をば

千穎  
八百穎に

奉り置きて

甌のへ高知り  
甌の腹満て双べて

汁にも  
穎にも

称へ辞竟へ奉らむ

延喜式祝詞に現れたる対句的表現についての覚書（足立）



と、苗を植ゑ、収穫し、穂を束ね、また酒にし、神前に献上するまでの儀礼的行為を、対句を何重にも重ね技巧的に表現してゐるのである。

また前掲した、

17 下つ磐根に宮柱太知り立て／高天原に千木高知りて  
は宮殿の建造といふ儀礼的行為を表現した対句でもある。

このほかにも、

19 朝には御門を開き奉り／夕べには御門を閉て奉りて  
69 本打ち切り／末打ち断ちて

などがあるが、種類が多いといふ訣ではない。ただし2・7、特に「6 甕のへ高知り／甕の腹満て双べて」や、17の対句は大半の祝詞に出現する。無論、対句となつてゐない儀礼行動の表現は祝詞内に多数見られるのであるが。対句的表現としては、特にこの二種類が定型化したのであらう。

⑤ 対偶・対比を利用した表現の美——いはゆる漢詩的対句——

祝詞における対句的表現のなかでも、特に技巧が凝らされてゐる例も多数存在する。短いものでは、

2 手肱に水沫画き垂れ／向股に泥画き寄せて

17 下つ磐根に宮柱太知り立て／高天原に千木高知りて

19 朝には御門を開き奉り／夕べには御門を閉て奉りて

などがある。これらはいはゆる漢詩的対句であらう。19における「朝／夕」は、先に見たやうな〈一日中〉を意味す

るものではなく、それぞれ特定の時点を指してゐる。

また長いものとしては、24〜29を含む、

皇神の見霽かし坐す四方の国は、<sup>1a</sup>天の壁立つ極み、<sup>2a</sup>国の退き立つ限り、<sup>3a</sup>青雲の靄く極み、<sup>3b</sup>白雲の墮り坐向伏す限り、<sup>4a</sup>青海の原は棹柁干さず、<sup>4b</sup>舟の艫の至り留まる極み、<sup>5a</sup>大海に舟満てつづけて、<sup>5b</sup>陸より往く道は、<sup>6a</sup>荷の緒捕縛ひ<sup>6b</sup>堅めて、<sup>7a</sup>磐根・木根履みさくみて、<sup>7b</sup>馬の爪の至り留まる限り、<sup>8a</sup>長道間無く立てつづけて、<sup>8b</sup>狭き国は広く、<sup>9a</sup>峻しき<sup>9b</sup>国は平らけく、<sup>10a</sup>遠き国は八十綱打ち掛けて引き寄する事の如く、<sup>10b</sup>皇大御神の寄さし奉らば（祈年祭）

といふ一節がある。これの構造をこれまでのごとく示さうとするとさすがに一頁では収まらないので、便宜上記号を附して対応関係を示した。かういった例は、厳密には文法構造が全く同一ではない箇所もあるものの、非常に手の込んだ漢詩的対句であると云へる。

以上、先学たちが積み重ねてきた上代歌謡における対句の分類に従って、延喜式祝詞に現れたる対句的表現の分類を試みてきた。結果、上代歌謡に見られるやうな対句は、祝詞においても確認できるといふことが判明した。

#### 四、延喜式祝詞に現れたる対句的表現の順序

表に示したやうに、対句的表現には、その順序が前後してゐるものもあつた。用例が多く、定型文となつてゐるやうな一節の中でも順序が入れ替はつてゐる場合もあり、表現全体が定型句であっても、必ずしも順序が固定されてゐる訣ではないやうである。

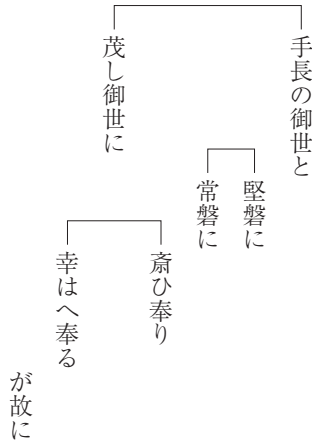
延喜式祝詞に現れたる対句的表現についての覚書（足立）

具体例として、祝詞において最も慣用的と思はれる次の一文を挙げて考察していく。

皇御孫の命の御世を手長の御世と、堅磐に常磐に斎ひ奉り、茂し御世に幸はへ奉るが故に（祈年祭）

この構造は、

皇御孫の命の御世を



となつてゐる。いま便宜上初出である祈年祭祝詞の章句を示したが、春日・平野・久度・月次・大殿・道饗・大嘗・御魂・伊月・伊同嘗・出雲の各祝詞にも同様の文言が見え、最も慣用的な表現のひとつである。<sup>19)</sup>

ここで注目したいのは、かかる表現が慣用表現として多くの祝詞に見られるなかで、「14 堅磐に／常磐に」の部分は春日・御魂・伊月・伊同嘗では「常磐に／堅磐に」と逆順になってゐる例があるのに対し、「16 斎ひ奉り／幸へ奉る」の部分はすべてにおいて順序が固定してゐるといふ点である。

「堅磐に／常磐に」は、「磐（岩）に不変性を認め、堅く永久に変わらないことを祈る言葉として表現したもの。永遠に、の意」<sup>20)</sup>である。これは『日本書紀』（九―二）の二ニギ尊とイハナガヒメとのくだりにおいて「磐石の有如<sup>たまはちかは</sup>あまひ

に常存とこぞらまし」とあることに淵源を持つ。<sup>(21)</sup>すなはちそれぞれ〈堅い磐のやうに〉、〈常にある磐のやうに〉の意で、天皇の御代の長久たることを磐に譬へた表現である。どちらの語も指向するところは同一で、語順が逆になつても意味の上で齟齬はない。

一方「齋ひ奉り／幸へ奉る」についてはどうであらうか。動詞「イハフ」の語義については以前にも少し論じたことがあるが、その用例を舐味するに、いづれの例においても〈対象の守護が期待されるやうにはたらきかける〉意が抽出された。<sup>(23)</sup>すなはち、意味するところは〈現状の維持の期待〉である。対して「サキハフ」は〈対象を幸あらしめる〉意であるから、すなはち意味するところは〈さらなる発展の期待〉である。どちらも天皇の御代の栄華を期待する意であることに変わりはないが、「イハフ」は現在のことを、「サキハフ」は未来のことを言祝ぐ章句である。なので、これらはこの語順で固定されなければならない。<sup>(24)</sup>

祝詞における対句的表現で順序が交替してゐる例が見られるのは、

- 7 汁にも／穎にも
- 14 堅磐に／常磐に
- 20 下より往かば、下を守り／上より往かば上を守り
- 37 足御世の／茂し御世に
- 41 千稲／八百稲に
- 45 いや高に／いや広に
- 58 聞き直し／見直し

の七例であるが、これらはすべて、順序が入れ替はつても意味するところに相違ない表現たちである。

延喜式祝詞に現れたる対句的表現についての覚書（足立）

たとへば逆順がある37に類似する「15 手長の御世／茂し御世と」は、逆順の例は存在しない。しかしこれは祝詞における表現の結果として逆順が存在してゐないだけのことであり、可能性としては存在してもよかつたはずである。このほかにも、意味を考へてみると逆になつてもよいが結果としては逆になつてゐないといふ例は少なくない。

また一方、たとへば「17 下つ磐根に宮柱太知り立て／高天原に千木高知りて」は、まづ土台部分を作り、そして屋根部分を作るといふ表現であり、実際の建築の順序に則つたものである。これは順序が逆になることはあり得ないし、祝詞における表現の結果としても逆になつてゐる例はない。このほかにも、意味を考へてみるとこの順序でなければならず、結果としても逆になつてゐるものは存在しないといふ例は少なくない。

すなはち、意味の上において順序が入れ替はつても問題なければ入れ替はることもあるし、固定されるべき順序であれば必ず固定されるといふことである。祝詞といふ祭祀における儀礼的章句で、全体としては慣用表現であつても、一定の柔軟性がある。これは延喜式祝詞に現れたる対句的表現の特色のひとつと云つてもよいのではなからうか。

## 五、結語

以上、上代歌謡における対句についての先行論を活用しつつ、延喜式祝詞に現れたる対句的表現について考察してきた。本稿で主張しなかつたことは次の三点である。

第一に、上代歌謡における対句についての先行論を、対句の機能についての指摘によつて①大事な部分の強調、②全体の表現、③心情の高揚の形式、④儀礼行動の強調、⑤対偶・対比を利用した表現の美の五種類の分類にまとめた。第二に、延喜式祝詞に現れたる対句的表現も、右の五種類に分類できることを確認した。

第三に、延喜式祝詞に現れたる対句的表現は、意味の上においてその順序が入れ替はつても問題なければ入れ替はることもあるし、固定されるべき順序であれば必ず固定されることを論じ、これは延喜式祝詞における対句的表現の特色ではないかと考察した。

祝詞は、律文的要素を多く含んでゐるが、歌謡のやうな「韻文」ではない。云はば「韻文的要素を持った散文」である。また、口頭で発せられた祝詞を起源としてゐるから、口誦的要素を多く含んでゐるが、実際は儀礼の場において神に対して善言美辞を尽くすことを目的に作文されたものであり、「口誦文芸」ではない。云はば「口誦文芸的要素を持った記載文芸」である。祝詞の韻文的散文・口誦文芸的記載文芸といふ独特な性質は、対句論を考へていくなかで重要な材料であるのではないか。<sup>(25)</sup>

また祝詞は、その性質上神を称へ辞竟へ奉ることを目的とした文章であるので、表現の美を追究した漢詩的対句の要素が多く見られる。一方で、祝詞を淵源とし、歌謡といふ関係にあるものでもあるから、原初的対句の要素も多く見られる。上代歌謡が、その制作時期によつて原初的対句が見られる歌謡と、漢詩的対句が見られる歌謡とによそ分かれるのに対し、原初的対句と漢詩的対句とが当然のやうに併存するといふ祝詞の性質もまた、対句論を考へていくなかで重要な材料になるのではないか。

対句論についての先行研究が、祝詞に触れつつも上代歌謡に焦点を絞つてゐるなかで、本稿が延喜式祝詞について焦点を絞る考察したことは少なからず意義があることであると考へる。しかしながら、表に示した調査結果を十分に活用できた訣ではないし、祝詞における対句的表現のすべてについて論じ尽くせた訣でもない。ゆゑに本稿はあくまで「覚書」とし、後攷を予定しつつ、また俟ちたい。

表 延喜式祝詞に現れたる対句的表現の用例および用例数

通番	表現				用例数																													
	第一句	第二句	第三句 / (備考)		祈年	春日	広瀬	龍田	平野	久度	月次	大殿	御門	大祓	鎮火	道襲	太管	御魂	伊祈	豊祈	伊衣	伊月	伊管	伊同管	伊斎	伊邊	泉神	遣唐	出雲					
1	天つ社	国つ社と			1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	4	
2	手取に水沫画き垂れ	向股に泥画き寄せて			1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	
3	依さし春らむ奥つ御年	取り作らむ奥つ御年			1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
4	八束穂の	いかし穂に			2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	3
5	千類	八百類に			1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
6	瓊のへ高知り	瓊の腹満て双べて			2	1	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	14
7	汁にも	類にも	(逆順あり)		2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	7	
8	甘蔗	辛菜			1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	5
9	鱈の広物	鱈の狭物			1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	10
10	奥つ藻葉	辺つ藻葉			1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	10
11	大野の原に生ふる物は	青海の原に住む物は			1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
12	明妙	照妙			1	1	2	3	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	15
13	和妙	荒妙			1	1	1	2	3	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	16
14	堅磐に	常磐に	(逆順あり)		1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	12
15	手長の御世	茂し御世			1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	4
16	斎ひ奉り	幸はへ奉り			1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	9
17	下つ磐根に宮柱太知り 立て	高天原に千木高知りて			1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	12
18	天の御蔭	日の御蔭と			2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	10
19	朝には御門を開き奉り	夕べには御門を閉て奉りて			1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	3	
20	下より往かば、下を守り	上より往かば、上を守り	(逆順あり)		1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	4
21	夜の守り	日の守りに			1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	5	
22	谷麩のさ度る極み	塩沫の留まる限り			1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	

23	狭き国は広く	艘しき国は平らけく	2	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	3
24	天の壁立つ極み	国の退き立つ限り	1	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	2
25	青雲の霽く極み	白雲の霞り坐向伏す限り	1	/	/	/	/	/	1	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	2
26	磐根	木根	1	/	/	/	/	/	1	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	2
27	舟の櫓の至り留まる極み	馬の爪の至り留まる限り	1	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	1
28	大海に舟滿てつづけて	長道間无く立てつづけて	1	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	1
29	四方の国は	遠き国は	1	/	/	/	/	/	1	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	2
30	甘菜	辛菜	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	5
31	長御膳の	遙御膳と	2	/	1	1	/	/	1	/	/	/	1	/	/	/	/	/	/	/	/	6
32	遠山	近山	1	/	/	/	/	/	1	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	2
33	大木	小木	1	/	/	/	/	/	1	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	2
34	朝御食	夕御食	1	/	/	/	/	/	1	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	3
35	安幣帛の	足幣帛と	/	1	1	1	/	/	/	/	/	/	1	/	/	/	/	/	/	/	/	5
36	平らけく	安らけく	/	2	1	/	/	/	3	1	/	1	/	/	1	/	/	/	/	/	/	9
37	足御世の	茂し御世に	/	1	/	/	/	/	1	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	2
38	和箱	荒箱	/	/	1	2	/	/	/	1	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	4
39	山の和き物	毛の荒き物	/	/	1	1	/	/	/	1	/	1	/	/	/	/	/	/	/	/	/	4
40	山に住む物は	大野の原に住ふる物は	/	/	1	1	/	/	1	/	/	/	/	/	1	/	/	/	/	/	1	3
41	千箱	八百箱に	/	/	1	1	/	/	1	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	2
42	悪しき風	荒き水に	/	/	1	2	/	/	1	2	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	3
43	忘る事無く	遣る事無く	/	/	1	1	/	/	1	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	1
44	朝日の日向かゝる	夕日の日隠る	/	/	1	1	/	/	1	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	1
45	いやは高に	いやは広に	/	/	/	/	/	1	1	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	2
46	万千秋の	長秋に	/	/	/	/	/	/	1	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	1
47	磐根	木の立ち	/	/	/	/	/	/	1	1	/	1	/	/	/	/	/	/	/	/	2	
48	大峽	小峽	/	/	/	/	/	/	1	1	/	1	/	/	/	/	/	/	/	/	/	1
49	大宮地は	高天の原は	/	/	/	/	/	/	1	1	/	1	/	/	/	/	/	/	/	/	/	1
50	底つ磐根の極み	青雲の霽く極み	/	/	/	/	/	/	1	1	/	1	/	/	/	/	/	/	/	/	/	1
51	下つ磐根	天の血垂	/	/	/	/	/	/	1	1	/	1	/	/	/	/	/	/	/	/	/	1

延喜式祝詞に現れたる対句的表現についての覚書（足立）



通番	表現			用例数																各計										
	第一句	第二句	第三句 / (備考)	祈年	春日	広瀬	龍田	平野	久度	月次	大般	御門	大祓	鎮火	道襄	太誓	御魂	伊祈	豊祈		伊衣	伊月	伊誓	豊誓	伊同誓	伊斎	伊遷	崇神	遷唐	出雲
52	はふ虫の袖无く	飛ぶ鳥の袖无く		/	/	/	/	/	/	/	1	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	1
53	引き結べる菫目の緩ひ	取り遣ける草の噪き		/	/	/	/	/	/	1	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	1	
54	御末つひのさやぎ	夜めのいすすき		/	/	/	/	/	/	1	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	1	
55	持ち斎まはり	持ち斎まはり		/	/	/	/	/	/	1	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	1	
56	明和幣	唯和幣		/	/	/	/	/	/	1	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	1	
57	神直日命	大直日命		/	/	/	/	/	/	1	1	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	1	/	3	
58	聞き直し	見直して	(逆順あり)	/	/	/	/	/	/	1	1	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	2	
59	ひれ懸ぐる伴の緒	襦懸ぐる伴の緒		/	/	/	/	/	/	1	1	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	2	
60	手の躰	足の躰		/	/	/	/	/	/	1	1	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	1	
61	邪しき意	穢き心		/	/	/	/	/	/	1	1	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	1	
62	宮進めに進め	宮勤めに勤めしめ		/	/	/	/	/	/	1	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	1	
63	相ひまじこり	相ひ口会へ		/	/	/	/	/	/	1	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	1	
64	鞍負ふ伴の男	劍佩く伴の男		/	/	/	/	/	/	1	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	1	
65	伴の男の	八十伴の男		/	/	/	/	/	/	1	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	1	
66	鞆へ給ひ	清め給ふ		/	/	/	/	/	/	1	3	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	3	
67	天の磐座放ち	天の八重雲をいつのち別き	天の八重雲をいつのち別き	/	/	/	/	/	/	1	1	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	1	
68	天つ罪	国つ罪		/	/	/	/	/	/	1	1	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	1	
69	本打ち切り	末打ち断ちて		/	/	/	/	/	/	1	1	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	1	
70	本切り断ち	末切り切りて		/	/	/	/	/	/	1	1	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	1	
71	天つ祝詞の	天祝詞事		/	/	/	/	/	/	1	2	/	/	/	/	/	/	/	/	/	1	/	/	/	/	/	/	/	5	
72	天の磐石を押し抜きて	天の八重雲をいつのち別き	天の八重雲をいつのち別き	/	/	/	/	/	/	1	1	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	1	
73	高山の末	短山の末		/	/	/	/	/	/	2	2	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	2	
74	高山のいゑり	短山のいゑり		/	/	/	/	/	/	1	1	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	1	
75	朝の御霧	夕の御霧		/	/	/	/	/	/	1	1	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	1	
76	朝風	夕風		/	/	/	/	/	/	1	1	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	1	



注

(1) 青木紀元編『祝詞』(桜風社 昭和五十年)

(2) 日本古典文学大系3『古代歌謡集』(岩波書店 昭和三十二年)

(3) 『新潮日本古典集成 萬葉集』一(新潮社 昭和五十一年)

(4) 表における凡例は次のとおりである。

一、「用例数」欄における各祝詞の名称は次のとほりの略称を用ゐてゐる。

祈年祭↓祈年

春日祭↓春日

廣瀬大忌祭↓広瀬

龍田風神祭↓龍田

平野祭↓平野

久度古關↓久度

六月月次↓月次

大殿祭↓大殿

御門祭↓御門

六月晦大祓↓大祓

鎮火祭↓鎮火

道饗祭↓道饗

大嘗祭↓大嘗

鎮御魂齋戸祭↓御魂

伊勢大神宮 二月祈年六月十二月月次祭↓伊祈

同 豊受宮↓豊祈

同 四月神御衣祭↓伊衣

同 六月月次祭↓伊月

同 九月神嘗祭↓伊嘗

同 豊受宮同祭↓豊嘗

同 同神嘗祭↓伊同嘗

同 齋内親王奉入時↓伊齋

同 遷奉大神宮祝詞↓伊遷

遷却崇神↓崇神

遣唐使時奉幣↓遣唐

出雲國造神賀詞↓出雲

なほ「東文忌寸部獻横刀時呪」は、和語の表現ではないため本稿での考察の対象外とした。

二、「明妙／照妙」(祈年祭等)・「明多閉／照多閉」(春日祭等)のやうに、原文において表記に差があっても同一の対象を指してゐると考へられるものについては、同一の例として計上した。

三、「下つ磐根に宮柱太知り立て」(祈年祭等)・「下つ磐根に宮柱太敷立て」(六月晦大祓)のやうに、表現に差があっても意味

延喜式祝詞に現れたる対句的表現についての覚書(足立)

としてほぼ同一であれば、同一の例として計上した。

四、「堅磐に／常磐に」(祈年祭等)・「常磐に／堅磐に」(鎮御魂齋戸祭等)のやうに、それぞれの句がまったく同一であっても、その順序が異なるものがあるが、同一の例として計上し、「第三句／(備考)」欄に「(逆順あり)」と記した。

五、このやうに同一として扱ってゐる例においても、表記や表現、語順等に差異がある場合があるが、表には基本的に初出の表現を示した。

六、「磐根／木の立ち／草のかき葉」(六月晦大祓等)・「石根／木の立ち／青水沫」(出雲国造神賀詞)、「大野の原に生ふる物は／青海の原に住む物は」(祈年祭等)・「山に住む物は／大野の原に生ふる物は／青海の原に住む物は」(広瀬大忌祭等)のやうに、文脈的に同一であり、ひとつ以上の句が重複してゐても、ひとつの句がまったく異なる、あるいは欠落してゐるものは、別の例として計上した。

(5) 橘守部著『長歌撰格』巻上(『新訂増補橘守部全集』第十一(東京美術 大正十年) 一六頁)

(6) 稲村眞里著『祝詞作文』(神社新報社 昭和三十一年)第九章「祝詞の修辭法」(七二～七七頁)

(7) 大畑幸恵「(対句) 論序説 —— 記紀歌謡及び初期万葉長歌の(対句) ——」(『国語と国文学』第六百四十九号(東京大学国語文学会 昭和五十三年) 所収)

(8) 稲岡耕二「万葉集の方法 —— 対句の本質 ——」(『国文学 —— 解釈と教材の研究 ——』第二十八巻第七号(學燈社 昭和五十八年) 所収)

(9) 神野富一「古代歌謡の対句 —— (繰返し) を超えて ——」(『甲南国文』第三十二号(甲南女子大学国文学会 昭和六十年) 所収)

(10) 神野富一「古代歌謡の対句 —— その本質 ——」(『甲南女子大学研究紀要』21(甲南女子大学 昭和六十年) 所収)

- (11) 神野志幸恵「対句」の方法・覚書」(稲岡耕二編『声と文字 上代文学へのアプローチ』(塙書房 平成十一年) 所収)
- (12) 山本直子「古代歌謡の対句と祭式儀礼」(『同志社国文学』65(『同志社大学国文学会』 平成十八年) 所収)
- (13) 粕谷興紀著『延喜式祝詞 (付) 中臣寿詞』(和泉書院 平成二十五年) 六六頁
- (14) 前掲 粕谷『延喜式祝詞 (付) 中臣寿詞』 一〇八頁
- (15) なほ祝詞では「朝」「夕」の場合は必ず「朝↓夕」、「昼(日)」「夜」の場合は92を除き「夜↓昼」の順序になってゐる。井手至「萬葉集における対偶語の用法」(『国語と国文学』第五十三卷第五号(東京大学国語国文学会 昭和五十一年) 所収) の調査によると、「万葉集」では「朝↓夕」「昼↓夜」が大多数を占め、後者は祝詞とは反対である。我が国にはもとも夜から一日が始まるといふ考へ方もあったが、漢語「昼夜」に影響されて「昼↓夜」といふ順序が定型化したのだといふ。
- (16) 前掲 粕谷『延喜式祝詞 (付) 中臣寿詞』 一二四頁
- (17) 次田潤著『祝詞新講』(明治書院 昭和二年) 九五頁
- (18) 青木紀元著『祝詞全評釈』(石文書院 平成十二年) 一三七頁
- (19) 「手長の御世と／茂し御世に」の部分は祝詞によって変動する。また「平けく／安らけく」が挿入されることもある。しかしいづれの例においても「堅磐に／常磐に」は必ず出現するし、「斎ひ奉り／幸へ奉る」も神宮の祝詞では「斎ひ奉り」が欠落するもの、それ以外の祝詞では必ず出現する。
- (20) 前掲 粕谷『延喜式祝詞 (付) 中臣寿詞』 七〇頁
- (21) 金子善光「祝詞・宣命慣用句考」(『神道及び神道史』第三十九・四十号(國學院大學神道史學會 昭和五十八年) 所収)
- (22) 拙稿「神籬の実体と機能と——動詞「イハフ」を手がかりとして——」(『神道史研究』第六十九卷第二号(神道史学会 令和三年) 所収)

延喜式祝詞に現れたる対句的表現についての覚書(足立)

(23) 旧稿では触れなかったが、大殿祭祀詞において「イハフ」が「護」字で表記されること、道饗祭祀詞に「83 守り奉り／斎ひ奉れ」といふ表現があることもその傍証とならう。

(24) この点については、筆者が皇學館大学大学院に提出した博士学位請求論文「祭祀の研究——その言語と行為——」（皇學館大学術リポジトリ (<https://kogakkan.repo.nii.ac.jp/>) 掲載予定) 第二章「マツル」周辺の言語」においても触れた。

(25) 「韻文的散文・口誦文芸的記載文芸」と云へば、もと語られたものであると考へられる『古事記』の散文部もさうである。これまで対句は口誦のレベルでの表現形式であると考へられてきたので、散文に見られる対句的な表現については論じられることがなかったが、山本氏は散文部にも対句的表現が見られることを指摘し、「これまで歌謡という口誦の表現形式の中で発生し、展開したとらえられてきた対句が、実は、散文にも通じる要素を以っていた可能性を示唆しているのではないだろうか。」と述べてゐる（前掲 山本「古代歌謡の対句と祭式儀礼」）。散文部に見られる対句的表現も重要だといふ点には賛同するが、散文部もと語られたものであることを考へれば、対句が口誦のなかで展開してきたこと以上のことは云へないのではないかと、むしろ、もと口誦であった部分が散文として記載文芸になっても、行為を叙述するにあつたの対句が色濃く残つてゐることが、山本論にとつて（そしてあるいは本稿にとつても）重要なのではないか。『古事記』散文部における対句的表現についての問題は大変重要であると考へるが、本稿では論ずる余裕を持たなかつたので、機会を改めたい。

【附記】本稿を執筆するに際しては、皇學館大学助教の高野裕基先生、同学非常勤講師・結城神社権禰宜の田井健治先生、同学大学院神道学専攻博士後期課程の松本航佑氏より、同学の空を仰げる一廓で、一廓の皿を囲める会同で、紫の灼けの空気を飲みながら、物思ひの草の煙を焚きながら、いろいろ議論を尽くしつつ、くさぐさ助言を賜つた。末筆ながら感謝いたします。

（あだち りょう・伊賀一宮 敢國神社 権禰宜）